

〈研究ノート〉  
メキシコ・ユカタン州における農地改革（1915-40年）について  
— エネケン・アシエンダの債務労働者を中心に —

吉野達也

要 旨

Este artículo trata sobre el proceso de la reforma agraria en el Estado de Yucatán (1915-40), el cual influyó en la vida de los peones que trabajaron en las haciendas henequeneras. En comparación con otros estados de México, el caso de Yucatán fue excepcional, puesto que se organizó el ejido colectivo para mantener la eficiencia productiva del henequén.

Desde la época colonial en Yucatán existía la fuerza de trabajo conocida como “lunero”. Hasta que se estableció la hacienda henequera, el hacendado no exigía el tributo laboral a los trabajadores agrícolas. Desde el comienzo del siglo XIX se inició el cultivo henequenero por la demanda internacional y en 1878 la empresa agraria estadounidense McCormick empezó a comprar inmensa cantidad del henequén para su maquinaria agraria; fue como surgió el auge henequenero en Yucatán a partir de 1870s. Los hacendados emplearon a los trabajadores agrícolas como peones y consolidaron el control del peón para aumentar el nivel productivo del henequén.

Por otra parte, en el norte y el centro de México, después de estallar la Revolución Mexicana se organizaron los rebeldes para exigir tierra y libertad. Sin embargo, en Yucatán, no se formaron esos grupos y tardó 5 años en recibir la influencia de la Revolución debido a que los peones no tenían fuerza suficiente para organizar un grupo rebelde. En 1915 el gobernador Salvador Alvarado liberó a los peones del control hacendatario y aseguró sus vidas con los preceptos democráticos. Después de la reforma de Alvarado, Felipe Carrillo Puerto asumió su política e intentó radicalizarla. Finalmente el presidente Lázaro Cárdenas concluyó la reforma agraria con la modernización de la industria henequera.

キーワード：メキシコ革命，農地改革，エネケン産業，債務労働者，ラサロ・カルデナス

はじめに

メキシコ革命（1910-40年）の成果として，農民生活を保障する理念が1917年憲法第27条に盛り込まれた。農地改革に関しては，おもにメキシコ北部や中央部の事例で扱われることが多い。本稿の目的は，1915年から1940年のあいだにメキシコ南東部に位置するユカタン州において実施された農地改革が，エネケン・アシエンダの債務労働者にいかなる影響を与えたか考察することにある。

たとえば、メキシコ北部ではメキシコ革命勃発後、ヤキ平野を中心に農場労働者が土地や水利を求めて大規模な反乱軍を組織し、中部モレロス州ではサトウキビ・アシエンダにおいて低所得で働いていた労働者や零細農民が反乱軍に参加した。両地域では労働者や農民が自ら反乱軍を組織し、連邦政府や州政府に対して農地改革を要求した。他方、ユカタン州では内発的に革命軍が組織されず、農地改革をはじめとしたメキシコ革命の影響が波及するのは、サルバドル・アルバラド州知事（Salvador Alvarado, 任期 1915-18 年）が護憲軍と共にユカタン州へ入る 1915 年以降のことであった。ジョセフはユカタン州におけるメキシコ革命を、「外からの革命（Revolución desde afuera）」と定義づけている<sup>1)</sup>。ユカタン州では、エネケン産業の重要性から「アセダード（農園主）のいないアシエンダ」という概念をもとに集団エヒードが設置された。集団エヒード政策は、自立的なエヒード農民の育成を目的とする他地域における農地改革とは明らかに異なっている。したがって筆者はユカタン州における農地改革を考察することで、メキシコ革命の新たな側面を提示することが可能であると考えている。さしあたり本稿では、大規模な農地改革を実施したカルデナス改革がエネケン・エヒード農民の生活にいかなる影響を及ぼしたかを考察したい。

1 節ではエネケン産業発展期における債務労働者の状況を扱い、2 節ではメキシコ革命勃発後のアルバラド、フェリペ・カリジョ・プエルト（Felipe Carrillo Puerto, 任期 1922-23 年）両州知事による改革、3 節ではカルデナス大統領（Cárdenas, 任期 1934-40 年）による改革を分析し、結びで今後の課題を挙げる。

## 1. エネケン産業発展過程における債務労働者の状況

エネケン（henequén）は竜舌蘭の一種で、葉脈から良質の繊維が抽出できる。18 世紀末までマヤ先住民共同体でのみ栽培がされていたが、19 世紀初頭に商品作物としての価値が見出され、ユカタン州のオリガルキーが徐々に栽培を始め、策具（船舶に使われるロープ）、袋、蚊帳、ハンモックなどを生産しヨーロッパやキューバへ輸出していた。ただしエネケン栽培が本格化するのには、米国資本がエネケン繊維を大量に購入するようになる 1870 年代以降のことである。

19 世紀初頭のユカタン州南部や南東部にはサトウキビ・アシエンダ、北西部にはトウモロコシ・牧畜アシエンダ（hacienda de maicero-ganadera）が存在し、ルネーロ（lunero）<sup>2)</sup> とよばれる独特の小作農が働いていた<sup>3)</sup>。この種のアシエンダにおける夫役労働の要求は比較的緩やかなものであった。他方、サトウキビ栽培には広大な農地と莫大な労働力を必要とするため、サトウキビ・アシエンダではマヤ先住民がアシエンダへ取り込まれ、長時間労働を強制された。とりわけサトウキビ栽培の刈入れ期（4 月から 5 月）はマヤ先住民の大切な食料であるトウモロコシの栽培時期と重複する。それゆえ食糧調達に大きな支障をきたしマヤ先住民のあいだで不満が爆発し、1847 年に勃発したカスタ戦争の一因となる。カスタ戦争はおもにユカタン州南東部で展開し、サトウキビ・アシエンダは壊滅的な打撃を受ける。他方、マヤ反乱軍の攻撃を免れたユカタン州北西部では、州南部と南東部の戦禍から退避した人々が移り住んだ。1846 年のセンサスによると、州全体に占める北西部の人口比率は州全体の 21.8% であったが 1864 年には 33.5%、1883 年には 41.1% まで上昇した<sup>4)</sup>。この北西部への人口流入は大きな労働力を必要とするエネケン・アシエンダの発展に寄与することとなった。

19 世紀後半に入り、エネケン繊維の国際需要が飛躍的に高まる。ユカタン州北西部のトウモロ

コシ・牧畜アシエンダは、次第にエネケン・アシエンダに転化していった。エネケン栽培は年間を通じて大量の労働力と土地を要したことから、エネケン・アシエンダへ移行するためには特に労働力と農地の確保が必須であった。そこで、アセングードはアシエンダ内の小作地を取り上げて、労働者に債務を負わせながら労働を強制した<sup>5)</sup>。債務労働者（peón）はアセングードから賃金を前金で受け取り長時間働いた。またアセングードと債務労働者の関係はエネケン生産だけに限らず、洗礼や婚礼といった祭事にもアセングードが介入し、労働者に代わって費用を負担することで債務額に上乘せした。さらに1843年、債務を完済できない労働者がアシエンダから出ることを禁ずる州法が施行された。

1870年代に米国の農機具会社マコーミック社（McCormick Harvesting Machine Company）が、小麦自動刈り取り・結束機（binder twine）を開発した。この農業機械は、小麦の刈り取りと結束を一度にこなせる画期的なもので、米国内において急速に普及した。そして、結束用の紐としてエネケン繊維が採用された。マコーミック社のエネケン繊維の大量購入によって、19世紀末にユカタン州はメキシコ国内で最も豊かな州の一つとなった。

しかしこのユカタン州の経済発展に反して、エネケン・アシエンダで働く債務労働者の生活は悪化の一途をたどる。アセングードはアシエンダの生産性を高めるため、債務労働者をさらに酷使し、彼らの賃金を低く抑えた。アシエンダ内の物価はアセングードによって一方的につりあげられたため、債務完済は事実上不可能であった。彼らの労働形態は事実上、農奴制と呼ぶべきものであったが<sup>6)</sup>、19世紀後半にユカタン州の農業委員会は奴隷制を禁止しており、雇用主であるアセングードも債務労働者を奴隷とは公には呼ばなかった。1908年に『野蛮なメキシコ』（*México bárbaro*）を出版した米国人ジャーナリストのターナーは、アセングードに取材したときのことを以下のように述べている。「アセングードは自ら管理する労働者を奴隷とは呼ばない。特にアシエンダ関係者以外の人々と会話をする際には、人あるいは労働者という表現を使う。しかし私と内密に話をした時、アセングードは『そうだ、彼らは奴隷だ』と答えた」<sup>7)</sup>。

米国では南北戦争後に奴隷制が廃止され、不足した農業労働力が小麦自動刈り取り・結束機などの高度な農機具によって補われた。そしてこの発明はユカタン州のエネケンブームを生み、エネケン・アシエンダにおいて農奴制を強化する結果となった。またアシエンダ内ではエネケン生産量が増加するにつれ、労働力が著しく不足した。そこでソノラ州（Sonora）で反乱が起きた際に捕まった先住民のヤキ人（Yaqui）、そして日本の大陸殖民会社から送られた朝鮮半島出身入植者が、債務労働者として取り込まれた。

一方で米国でのエネケン繊維需要拡大から、オレガリオ・モリナ（Olegario Molina, 1902～06年ユカタン州知事, 1906～11年メキシコ勸業大臣）を中心としたユカタン州のオリガルキーは、1897年にエネケン繊維加工工場（La Industrial）を設立した。そしてユカタン州資本でエネケン繊維加工品を海外へ輸出する試みがなされた<sup>8)</sup>。だがこの繊維加工事業は、成功に至らなかった。1902年、マコーミック社を含む米国の大手農機具メーカーと有力金融資本が合併したインターナショナル・ハーベスター社（International Harvester Company, 以下IHC社）と、モリナのあいだで繊維を安く供給する密約が交わされた。この結果原材料としてのエネケン繊維輸出がさらに顕著となり、繊維加工会社は不採算と見なされ1903年閉鎖へ追い込まれた。

ディアス政権期の一次産品生産は、外国資本が直接現地に参入する直接投資が大半を占めた<sup>9)</sup>。ところがエネケン産業の事例では、マコーミック社やIHC社はアシエンダ経営には直接的に参加

せず、アセンダードへ間接的に資本投下をおこない、エネケン繊維の供給を受けた。したがってエネケン産業は全くの外発的発展の事例ではなく、現地資本がアシエンダを管理するという特異な事例であった<sup>10)</sup>。ただし、IHC社を中心とした資本投下無くしては、エネケン産業は成り立たなかったことも事実である。IHC社とユカタン州のあいだには、エネケン繊維の需要と供給を介した依存が垣間見える。そしてモリナとIHC社の密約により、エネケン産業の海外資本への従属がさらに強化される結果となった。この従属の結果は、債務労働者を始めとするエネケン産業を底辺で支えた労働者の所得や、雇用形態の改善に繋がられなかった一因ともなった。

## 2. アルバラド、フェリペ・カリジヨ両州知事による社会改革

1915年にカランサ大統領（Carranza, 任期1914-20年）の任命<sup>11)</sup>によりユカタン州入りしたサルバドル・アルバラド州知事は、1910年から始まったメキシコ革命から5年遅れて、ユカタン州の社会改革をおこなった。革命の波及が5年遅れた要因として、ユカタン州では農民を中心とした反乱軍が組織されなかったことが挙げられる。カスタ戦争を経てエネケン・アシエンダで働いた債務労働者の多くはマヤ先住民であった。彼らは白人が管理する社会で生活することを選択した者達であり、革命において反乱軍を組織することはなかった。エネケン栽培地帯は鉄道や道路網が発達しており、アセンダードや州政府による警備も行き届いていた。

1915年に出された政府声明では、農地改革に関する方針が明記された<sup>12)</sup>。連邦政府にとって農地改革実施は、一般的にポピュリズムとよばれる政策の目玉であった。しかしカランサがアルバラドに求めたのは、高い利益をあげていたエネケン産業規模を維持することであり、エネケン農地接収は実施しないように通達した。1900年から1908年の連邦政府輸出税において、エネケン輸出税は多い年で全体の53.2%を占め、連邦政府にとってもエネケンは重要な一次産品であった<sup>13)</sup>。このためアルバラド改革は、農地改革を重点にせず債務労働者をアセンダードの抑圧から救うことと、エネケン産業近代化を重点課題とした。エネケン産業近代化にあたっては、頂点に君臨していたモリナとその後継者でありモリナの娘婿であるアベリノ・モンテス（Avelino Montes）を、エネケン産業から排除した。ただし残りのアセンダードについては、アルバラドが構築するエネケン産業の新しい枠組みに取り込まれた<sup>14)</sup>。1915年アルバラドはエネケン市場規制委員会（Comisión Reguladora del Mercado del Henequén）の機能を掌握し、モリナ、モンテス、IHC社によるエネケン繊維売買独占を解体した。

債務労働者救済の政策として、まずアルバラドは彼らがアセンダードへ負っていた借金の帳消しを実施する。次にアルバラドは、アセンダードが債務労働者に対しておこなってきた様々な抑圧（鞭打ち、後見制、子供への奉公強要など）を禁止して労働環境改善に努め、最低賃金や最大労働時間の設定を実施した。また医療充実や農村学校創設などの社会福祉政策、当時としては先駆的であったジェンダー教育<sup>15)</sup>、ギャンブル、飲酒、売春の禁止といった倫理統制に至るまで改革を実践した<sup>16)</sup>。

こうしたアルバラド改革は、アセンダードにとってそれほど不都合なものではなかった。なぜならアセンダードが以前から守り続けてきた既得権益は、最大限に保障されたからである。アルバラドはエネケン農地接収をおこなわず、旧債務労働者の生活保障やIHC社によって低価格に設定されていたエネケン繊維価格是正を要に、ユカタン経済の改革を実施した。アルバラドがこの

ような改革を円滑に実現できた背景には、2つの理由がある。1つ目はアルバラドが陸軍将軍であり、改革に反対する者に対し場合によっては武力を行使できたこと。2つ目はアルバラドの任期中に第一次世界大戦が勃発し、軍事特需によるエネケン繊維価格上昇が起こったことにある。このことからアセンダードの利益は高水準で維持でき、旧債務労働者の賃金も増加した。たとえば1917年におけるエネケン・アシエンダの旧債務労働者の賃金は、平均2.70～4ペソ（2ペソ＝1米ドル）でありディアス政権期と比較すると2倍以上増加した<sup>17)</sup>。アルバラドは特需で得た豊富な資金を元手に、改革を継続することができた。

しかし1918年、アルバラド改革に対してカランサは改革実行停止を命令する。その背景として、あまりにも行き過ぎた改革だと判断された可能性がある。アルバラドが実施した改革は全てが成功には至らなかったものの、エネケンブーム以降長らく虐げられてきた債務労働者を解放させた意義は大きく、ユカタン州における改革の基礎を築いた。その後アルバラド改革をカリジョ・プエルト州知事が継承した。

カリジョ・プエルト州知事が就任した1922年当時、エネケン産業は不安定な状態であった。第一次世界大戦が終戦する1918年から、エネケン繊維需要にかげりが見え始める。需要低下による繊維価格低迷、また他の天然繊維（マニラ麻等）との競合によって深刻な停滞期に入る。エネケン産業はモノカルチュアの典型であり、エネケン産業による利益が大きく減少したユカタン経済は、危機に陥った。カリジョ・プエルトはユカタン社会党<sup>18)</sup> (Partido Socialista del Sureste) の党首でもあり、アルバラドが実施した労働者の生活保障実施やマヤ先住民保護政策を踏襲し、ユカタン州の下層階級や労働者階級の支持を獲得することに成功する。カリジョ・プエルトは特に女性の社会的地位向上やマヤ先住民に対する教育（マヤ語・スペイン語教育、先住民文化奨励）をおこない、ポピュリズム改革を実践した。

とりわけカリジョ・プエルトのポピュリズム改革で最も重要視されたのは、農地分配である<sup>19)</sup>。カリジョ・プエルトは、アルバラド州知事期にはほとんどおこなわれることのなかった農地改革に着手した<sup>20)</sup>。ユカタン州内で放棄されたエネケン・アシエンダや、エネケン以外の農作物を栽培する農地および未開墾の土地43万8000ヘクタールが、ユカタン州の78自治体に在住する2万3000人の農民に分配した。この分配面積は、国内ではモレロス州の事例に次ぐ大きなものであった<sup>21)</sup>。ところが、エネケン・アシエンダで働いていた旧債務労働者は、アシエンダから去らない限り農地分配の恩恵を受けることができなかった。さらにカリジョ・プエルトがエネケン繊維価格安定のためエネケンの減産を行ったことから、彼らは安定した仕事を得ることが出来なくなり不満を募らせた。また1923年に発表されたエネケン産業利益の25%を労働者の賃金改善に当てるという法令は、アセンダードの反感も買った。一方オブregon大統領（Obregón, 任期1920-24年）は、ユカタン州における改革の急進化を警戒し、計画が進められていたエネケン農地分配の妨害を画策した。

1920年代半ばになると、メキシコ各地で起こっていた改革による反乱は徐々に沈静化し、連邦政府による国家統合が進められた。したがってカリジョ・プエルトのような急進的の革命家は、国家統合を阻害する人物として排除される傾向にあった。1924年オブregonが影で操り、メキシコ各地で展開されたアドルフォ・デ・ラ・ウエルタ財務長官（Adolfo de la Huerta）の反乱部隊によってカリジョ・プエルトは拘束され、銃殺された。カリジョ・プエルトは、急進的な改革によって自らの支持者を確保することはできなかった。また国際的な需要低下によってエネケン繊維価格

が下落したことから、改革に必要な資金調達にも失敗した。エネケン農地で働く旧債務労働者の所得は、ユカタン経済低迷によって減少し、彼らの生活はますます厳しくなっていた。1930年代前半におけるユカタン州の乳児死亡率は、1000人に対して532.2人であった<sup>22)</sup>。この事実はユカタン州における保健や衛生環境が不十分であったことを証明している。

カリジョ・ブエルトの死後1924年から1933年のあいだ、ユカタン州における農地改革は進展しなかった。この間、連邦政府は度重なる大統領の交代で動揺しており、各政治家によって農地改革に対する共通認識が著しく異なっていたためであった<sup>23)</sup>。アルバラド、カリジョ・ブエルト両州知事がおこなったポピュリズム政策は、上流階級による抑圧から農民やマヤ先住民を解放したものの、彼らの経済的自立を促すまでには至らなかった。

### 3. カルデナスによる農地改革

カルデナス大統領は植民地期から存在していた大土地所有制を解体し、任期中それまでの歴代大統領で最も多い農地をエヒードとして分配し、1917年憲法第27条で盛り込まれた農民に対する社会保障制度を整えた。またカルデナスは、徹底した農業部門の効率化で農業生産を増加させ、エヒード農民を自立的な「農業企業家」に転化させようとした<sup>24)</sup>。

しかし全ての改革事例が農業企業家を育成する様式に則っていた訳ではない。たとえば、エネケンのようにディアス政権期（1876-1910年）において巨額の外貨を稼いでいた一次産品に関しては、エヒード農民に全ての経営を任せると生産高が不安定になる危険があった。そこでカルデナスは、有望な一次産品生産を集団エヒードとして管理し、積極的に介入した。そしてエヒード農民を「農業企業家」としてではなく、「農業労働者」的存在として扱った。

カルデナスは、エネケン産業が存在することからユカタン州における改革を重要視していた。連邦政府は国家の工業化に必要な資金獲得を目的に、エネケン産業の生産力向上を目指していた。カルデナスが大統領に就任する1934年当時、エネケンの世界的需要は落ち込んでいたが、メキシコ国家の農業輸出部門では高い利益をもたらす作物であった。表1で明らかのように、1929年から1933年まで農業輸出額に占める主要生産物の割合で未だエネケンが2位（19.8%）に入っており、メキシコ農業において重要な役割を果たしていた点が明確である。

表1. メキシコにおける農業輸出額に占める主要生産物の割合（1929-33年）

生産物	%
コーヒー	24.4
エネケン	19.8
野菜全般	18.3
バナナ	7.8
綿	6

出典：Askinasy, p.56

1934年の州政府資料によると、当時ユカタン州には大小合わせて614のエネケン・アシエンダが存在しており、全体の40%にあたる248でエネケンが栽培され、残りの60%にあたる364のアシエンダは放棄された状態であった<sup>25)</sup>。また同年のエネケン輸出量は8,643万キロで、最も輸

出された1916年の2億199万キロと比べると、57%の減少であった<sup>26)</sup>。エネケン栽培や繊維抽出作業などで働いていた約6万人の農業労働者は、エネケン繊維の減産政策で仕事が減り週2、3回のみ働くといった不安定な雇用形態での労働を余儀なくされていた。

アスキナシによれば、1935年から1936年に州政府が公式に発表した最低賃金は、日給で1.50ペソから3.00ペソ（1935年から1940年の1米ドルに対するメキシコペソの為替は、2ペソ～4ペソであった）であったが、6万人のエネケン農業労働者の多くは1.15ペソの日給で働いており、この給料では生活を維持することもままならなかった<sup>27)</sup>。

まずカルデナスはエネケン農地をエヒードとして分配し、エヒードの生産活動に円滑な融資を実施するため、1935年に国立農業信用銀行（Banco Nacional de Crédito Agrícola）のメリダ支店を設立した。同銀行傘下の組織であるエヒード信用組合（Sociedades de Crédito Ejidal）が農業指導も実施し、エヒードを手に入れた農民が安定した生産をおこなえる体制を整えた。そして国立農業信用銀行は、1) エネケン市場の復興に向けて協力すること、2) 農民の経済負担を軽減させるために雇用を直ちに創出すること、3) 農民がエヒードとして受け取るエネケン農地の開拓支援を実施すること、4) 州内の1,000ヘクタールを超える5つのエネケン栽培地帯に銀行援助による新しい苗を植えつけることをエヒード農民に約束した<sup>28)</sup>。またエネケン・エヒード農民は各アシエンダ単位で組合を形成し、その組合は全国農民連合（Confederación Nacional Campesina = CNC）として政府組織の末端として取り込まれていった。

しかし、エネケン・エヒードの経営状況は厳しいものであった。1936年12月時点では、53のエネケン・エヒードが国立銀行によって管理されていたが、その内26%にあたる14のみが収益を上げていた。残り39のエヒードでは、未熟で刈り取り不可能なエネケン苗や商品作物としての寿命が過ぎたエネケン株があるなど、エヒードによって栽培状況が異なっていた。その上、苗植え付けや栽培に不可欠な経済支援を受けられないエヒード農民も数多く存在していた<sup>29)</sup>。一方アセンダードは、1936年に制定されたエヒード規則によって、アシエンダ内の一定面積の土地所有が許されたため、エネケン繊維抽出機を備えた土地を手元に残した。その結果、多くのエヒード農民はアセンダードに高い手数料を払いながら、エネケン繊維を抽出しなけりならなかった。

エネケン産業の問題を根本的に解決すべく、1937年からカルデナスはより進んだ改革を実行する。カルデナスは1937年8月にユカタン州を3週間かけて歴訪し、8月8日にエネケン産業近代化に向けた具体的な法令を発表した。おもなものとしては以下の通りである。1) エネケン栽培地帯での集団農地化実施、2) エネケン産業労働者の農業国勢調査を受ける権利の保障、3) 農業法による農地保護、4) 集団エヒードが継続的生産を行うために必要な農機具購入や設備管理を国の機関が支援すること、5) エネケン栽培地帯工業化はすべて国と農民の共同作業によって行われること、6) 連邦政府と州政府の提案でエネケン繊維販売強化に必要な組織を作り、エネケン労働者代表も参加すること、7) 生産効率を上げるためにエネケン農業研究所を設置すること、8) エネケン繊維用途の多様化、9) エネケン地帯の通信網整備、10) 教育、医療の保障充実<sup>30)</sup>。カルデナスはユカタン滞在中、エヒード政策は経済を傷つけるものではなく、むしろユカタン経済を近代化させるために役立つと強調した<sup>31)</sup>。

大統領令発令後、さらなるエネケン農地分配がおこなわれ、1937年12月には272のエネケン・エヒードが誕生した。しかし、その内わずか4%にあたる10のエヒードのみにエネケン栽培に必要な支援が与えられ、33%にあたる89のエヒードでは繊維抽出機の利用権が十分に与えられず、

64%にあたる173のエヒードでは面積がそれほど広くないにも関わらず、過剰なエネケン苗が支給された<sup>32)</sup>。そしてエヒード農民が抱える様々な問題を解決すべく1938年、ユカタン・エネケン労働者組合（Henequeneros de Yucatán）が創設された。この団体はエネケンの生産から販売に関わる分野を州知事が代表となって一括管理し、小規模な地主となったアセンダード、そしてエネケン・エヒード農民の代表も組織運営に参加した。労働者組合は、産業管理だけではなく労働者の社会保障も統括した。しかし、エネケン労働者組合内部では汚職が蔓延した。アセンダードは組織の特権を使いながら経済的、社会的権力を取り戻そうとし、エヒードの調査員は自らの仕事を十分に遂行しないにも関わらず、高い報酬を受け取った。さらには生産者の中にもエネケン株数を水増しし、余分に助成金を騙し取る者も多く存在した<sup>33)</sup>。

そしてエネケン産業近代化の最終目標であり、カルデナスの念願であったエネケン・エヒードの集団化が、1938年カント・エチェベリア州知事（Canto Echeverría, 1938-40年）によって実行された。この結果300弱存在したエネケン個別エヒードは、5万人の農民が働く1つの集団エヒードとして取り扱われることになった。またこの集団エヒードの生産活動全てを引き続きユカタン・エネケン労働者組合が管理した。

集団エヒード政策により、各アシエンダ単位で生産を続けていたエネケン・エヒード農民は、政府の庇護で「農業労働者」的立場でエネケンを生産することになった。しかし集団エヒード農民の生活が、カルデナス改革前より改善できたかどうかは疑わしい。改革後のエネケン産業における管理の代表者が、農園主から政府に変わったにすぎず、エヒード農民の生活が著しく改善された訳ではなかった。そしてエネケン生産に必要な不可欠であった集団エヒードへの経済支援は常に不十分で、集団エヒード農民は改革後も引き続き最低水準の賃金レベルで生活しなければならなかった。

表2. ユカタン州における物価\*上昇（1934 - 1943年）

年	トウモロコシ	フリホール	米	ラード	砂糖	肉	合計	物価上昇率	給料上昇率
1934	0.14	0.19	0.40	1.00	0.30	1.00	3.03	0%	0%
1940	0.20	0.35	0.40	2.00	0.25	1.50	4.70	55%	23%
1941	0.25	0.42	0.55	2.25	0.35	1.75	5.57	84%	84%
1942	0.29	0.55	0.59	2.46	0.14	2.25	6.28	107%	90%
1943	0.35	0.48	0.60	3.02	0.25	3.10	7.80	157%	96%

出典：Betancour, p.145

\*すべての品目1キロあたりのペソ価格。

表2ではカルデナス在任中であった1934年から1940年のあいだ、エネケン農業労働者の賃金が1934年比で23%しか上がっていないにもかかわらず、物価は55%上昇したことがわかる。さらに穀物価格に注目すると、トウモロコシは1934年から1940年のあいだで約40%、フリホールは約80%上昇しており、主食である穀物価格上昇が農民生活を圧迫していたことは明白である。

ユカタン州の農業はエネケン栽培に偏っていたため、あらゆる食糧を他州から輸入しなければならず、物価は高水準に推移した。債務労働者はアルバラドからカルデナスまでの一連の改革によってアセンダードの抑圧からは解放されたが、経済援助が十分に受け取れない集団エヒードの農業労働者として、不安定な暮らしを余儀なくされた。

## 結びにかえて

ユカタン州におけるメキシコ革命の展開で異例だった点は、反乱軍が組織されなかったため革命が5年遅れて波及したことであった。農地改革についてはアセnderドなどのオリガルキーが産業保護の点から排除されなかったこと、そしてエネケンの生産性を最大限に高めるため集団エヒード化が実施されたことが、他州と比べると異例であった。アルバラドからカルデナスによる一連の農地改革は、債務労働者の生活を大幅に改善させることはできなかった。ただしアセnderドの抑圧から彼らを解放した意義は大きく、この実績が今日のアルバラド、カリジョ・プエルト、カルデナスの評価に繋がっている。

ユカタン州における農地改革の考察をさらに進めるには、農地改革に込められたポピュリズムの意義を再評価する必要がある。農地改革には、おもに農民の経済的自立の達成と国家経済形成という意図が込められていたが、ユカタン州では農地改革によってその意図がいかに実現されたのか今後さらに考察したい。

## 注

- 1) Joseph, 1990, p.24
- 2) ルネーロはアセnderドに夫役労働を週1回奉仕する代わりに、小作地を獲得し農業を営んでいた。週1回の夫役労働がおもに月曜日（lunes）におこなわれたことからその名がついたとされている。
- 3) Bracamonte, 1988, p.49
- 4) Suárez, 1977, p.49
- 5) 初谷, 1989, 22頁
- 6) 石黒は19世紀後半のメキシコの債務労働制は、人類史における奴隷時代の奴隷制とは異なり、世界資本主義における帝国主義形成段階における奴隷性的生産関係であると述べている。(石黒, 1988, 25頁)
- 7) Turner, 2008, p.13
- 8) 初谷, 2009, 198頁
- 9) 1897年の米国議会のデータでは米国は6億8,000万ドルの対外投資を行っているが、その内の93%にあたる6億3,000万ドルが直接投資に集中しており、その直接投資額の32%の2億ドルはメキシコに投下された。(初谷, 2009, 163頁)
- 10) Loc. cit.
- 11) アルバラドは選挙ではなく、カランサの任命によって州知事に就任した。
- 12) 1915年1月6日の政府声明の一部を紹介する。「政府はより多くの国民が自らの利益と発展を追求できるように、土地の割り当てを行っていく。この政策は国民が以前の古い共同体やそれに似たもので再び生活することを支援するものではなく、特に農村で貧困に苦しむ人々の日常生活の権利保障や大土地所有者への経済的従属を削減させるために行われる。」(Flores, 1961, p.401) 農地改革の理念は連邦政府の要となり、1917年憲法の第27条に盛り込まれることになった。
- 13) 初谷, 2009, 183頁
- 14) Othón, 1990, p.308

- 15) ユカタン州, メリダ市においてメキシコで初めてフェミニズム会議が行われた。会議についての詳細は松久の2005年に詳しい。
- 16) 松久, 2005, 234頁
- 17) Lapointe, 2008, p.80
- 18) ユカタン社会党は1912年アルバラドが結党した労働社会党 (Partido Socialista Obrero) の後身で, 党の名前に含まれる Sureste (南東) はユカタン半島を指しているため, 本稿では「ユカタン社会党」に置き換えた。
- 19) Othón, 1990, p.105
- 20) エネケン農地分配に当たってカリジョ・プエルトは, すでにエネケン株が栽培されていない農地を優先に選び, 農地分配によってエネケン生産が縮小することを最小限に防ごうとした。しかしエネケン農地分配の実施は, それまで分配を不可侵としてきた連邦政府の反感を買うことになった。
- 21) Ibid., p.82
- 22) Askinasy, 1936, p.38
- 23) 石井, 2003a, 38頁
- 24) 石黒, 1988, 37頁
- 25) Lapointe, 2008, p.108
- 26) Askinasy, 1936, pp.100-103
- 27) Ibid., pp.77, 82
- 28) *Diario del Sureste*, 15 de mayo de 1935
- 29) Lapointe, 2008, p.113
- 30) Gobierno del Estado de Yucatán, 1990, pp.31-34
- 31) Sierra y Paoli, 1986, p.42
- 32) Gobierno del Estado de Yucatán, 1941, p.546
- 33) Canto 2002, p.60 y Quezada, 2001, p.216

## 参考文献

アポイテス, ハイメ

- 1989 『メキシコ経済のレギュレーション—農業における接合と賃金労働関係の再編—』, (岡村哲史, 佐野誠訳), 大村書店。

石井章

- 2003a 「メキシコ 農地改革と農業政策の歴史的展開」, 『国際関係学部紀要』 (*Journal of College of International Studies*), 第30号, 中部大学国際関係学部, 33-53頁。
- 2003b 「メキシコのエヒードの制度とその実態」, 『国際関係学部紀要』 (*Journal of College of International Studies*), 第31号, 中部大学国際関係学部, 1-15頁。

石黒馨

- 1988 「土地所有とメキシコ革命—メキシコにおける資本主義発展の『2つの道』の対立—」, 『阪南論集 社会科学編』, 第24巻, 第4号, 阪南大学, 15-30頁。

大阪経済法科大学比較憲法研究会

1989 『メキシコ合州国憲法 1917 年』, 大阪経済法科大学研究会。

国本伊代

1992 「メキシコ革命とカランサ」, 『中央大学論集』 (*Journal of liberal arts.*), 第 13 号, 中央大学出版部, 45-60 頁。

2008 『メキシコ革命』, 山川出版社。

スタベンハーゲン, ロドルフォ

1981 『開発と農民社会—ラテンアメリカ社会の構造と変動』, (山崎春成, 原田金一郎, 青木芳夫訳), 岩波現代選書。

鶴見和子

1996 『内的発展論の展開』, 筑摩書房。

西島章次, 細野昭雄編著

2004 『ラテンアメリカ経済論』, ミネルヴァ書房。

畑恵子

1977 「メキシコ農地改革と農民組織—カルデナス政権を中心として—」, 『国際関係学研究』, 第 4 号, 津田塾大学紀要委員会, 47-66 頁。

初谷譲次

1986 「ユカタン・カスタ戦争（1847-53 年）におけるインディオの主体性について」, 『ラテンアメリカ研究年報』, 第 6 号, 日本ラテンアメリカ学会, 55-88 頁。

1989 「19 世紀後半ユカタン半島におけるエネケン産業の発展（1853 - 1902 年）—伝統的アシエンダからエネケンプランテーションへの移行—」 『ラテンアメリカ研究年報』 第 9 号, 日本ラテンアメリカ学会, 15-40 頁。

1991 「ディアス期メキシコにおける地方オリガルキーについて—ユカタン州モリナ家のエネケン産業支配—」, 『天理大学学报』 第 166 号, 天理大学学術研究学会, 141-166 頁。

2009 『アメリカス世界を生きるマヤ人』, むさし書房。

松久玲子

2005 「メキシコ革命期のユカタンにおける女子教育とフェミニズム会議」, 『言語文化』, 第 8 巻, 第 2 号, 同志社大学, 229-259 頁。

横山功

1984 「革命期メキシコにおける国家と社会—カルデナス期ポピュリズム国家に関する一考察—」, 『ラテンアメリカ研究』, No.9, 上智大学。

1996 「協調政治と国家, 農民関係—メキシコにおけるコーポラティズムの変容分析」, 『イベロアメリカ研究』, 第 18 巻 2 号, 上智大学, 35-56 頁。

Askinasy, Siegfried

1936 *El problema agrario en Yucatán*, Ediciones Botas, México.

Aznar Mendoza, Enrique

1977 "Historia de la industria henequenera desde 1919 hasta nuestros días", En *Enciclopedia yucatanense*, Tomo III, Edición oficial del gobierno de Yucatán, Mérida, Yucatán, pp.726-787.

Baños Ramírez, Othón

1987 *Yucatán, ejidos sin campesinos: recuperación de la política agraria en las formas de vida de los ejidatarios.*, Ediciones de la Universidad Autónoma de Yucatán.

1989 *Yucatán: Ejidos sin campesinos*, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, Yucatán.

1990 *Crisis del ejido, crisis de los campesinos*, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Betancour Pérez, Antonio

1986 *Revoluciones y crisis en la economía de Yucatán*, Maldonado Editores, Mérida, Yucatán.

Bracamonte, Pedro

1988 *Amos y sirvientes: las haciendas de Yucatán 1789-1860*, la Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Canto Sáenz, Rodolfo

2002 *Del henequén a las maquiladoras, La política industrial en Yucatán*, pp.55-68, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, Yucatán.

*Diario del Sureste*

Echeverría, Pedro

1985 *La política en Yucatán en el siglo XX*, Maldonado Editores, Mérida, Yucatán.

Flores, Edmundo

1961 *Tratado de economía agrícola*, Fondo de Cultura Económica, México, D.F.

Gobierno del Estado de Yucatán

1941 *El ejido henequenero de Yucatán*, Tomo 2, Gobierno del Estado de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Gobierno del Estado de Yucatán

1989 *Lázaro Cárdenas (1934- 1937), Discursos*, Gobierno del Estado de Yucatán, Mérida. Yucatán.

Joseph Gilbert

1990 *Revolución desde afuera Yucatán, México y los Estados Unidos 1880-1924*, Fondo de Cultura Económica, México D.F.

Lapointe, Marie

2008 *Historia de Yucatán. Siglos XIX-XXI*, Universidad Autónoma de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Quezada, Sergio

2001 *Breve Historia de Yucatán*, Fondo de cultura económica, México D.F.

Suárez Molina, Víctor

1977 *La evolución económica de Yucatán del siglo XIX*, tomo II, Ediciones de la Universidad de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Sierra Villarreal, Luis José, Paoli Bolio y José Antonio

1986 *Cárdenas y el reparto de los henequenes*. ICY (Instituto de Cultura de Yucatán), Gobierno del Estado de Yucatán, Mérida, Yucatán.

Turner Kenneth John

2008 *México bárbaro*, Colofón S.A., México D.F.

